

シラノちゃんは設定年齢11歳

しずくまい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神奈川県平塚市に現れた人の目には映らない少女『シラノちゃん』
11歳の幼女は

「りぱーっ☆」

と笑いかけながら、ただただ日常を楽しむだけの物語です。

呪い？ 崇拜するシラノへ捧げる？ はい、頂きますが

体の一部はいりません。わっちは美味しいおやつを所望します!!

可逆性SNSミステリー『Project:;COLD』の登場人物たちとの日常を楽しむ系の物語。ここにでてきたシラノは残念ながら剪定された代物です。

discordの綴りを間違っていたことを告白しておきます(吐血

目次

く佐久間ヒカリちゃんの場合く	1
く岩永静ちゃんの場合く	3
く岩永静ちゃんの場合2く	6
く星野理也さんの場合く	9
く番外・本編の奈々乃さんとここにシラノちゃんたちが行ってみたく	13
く番外 本編の『玲子さんの汚点』でつちあげ前編く	16
く番外 本編の『玲子さんの汚点』でつちあげ中編く	19
く番外 本編の『玲子さんの汚点』でつちあげ後編く	23
く森いちごちゃんの場合く	27
く森いちごちゃんの場合2く	32
く青島 玲子さんの場合く	35
く三嶋先生の場合く	38
く校長先生の場合く	41

く佐久間ヒカリちゃんの場合く

その出会いはなんといいたらいいのか。

バンドで路上ライブをしている時に迷子を見つけた。

物珍しそうに、それでいておつかなびつくりとした感じは小動物のそれに近い。

しやがんでどうしたの？ と聞いてみた。

「あ、あなたは誰？」

あら可愛い声。思わず頭を撫でたくなる衝動を抑えて

「迷子？…こんな時間に危ないよ？」

と続けてみた。

もう既に夜の9時。夜の街にはいろんな人が出てくる。こんな少女？ 幼女がいる時間帯ではない。

「わ、わっちは……」

わっち？ 一人称がどこの萌えキャラなの？

大きく深呼吸してはなにやら小さく「よしっ」と気合を入れている。

「シラノちゃん設定年齢11歳独身幼女!! 貴方は見える子ね？」

「設定年齢って」

苦笑いしてしまうが、大したことじゃない。大人びる子どもはそう見せようと頑張っているのだ。経験もある。

「お父さんとお母さんは？」

「いないよ？」

「じゃシラノちゃん。ここでどうしたの？」

「おなかすいてた」

「じゃ、これいる？」

手にしていたのはライブ中にもらったシュークリーム。夜食のおやつ。

「たべるー」

……とりあえず抱きしめていいだろうかこの可愛い生物。

袋をあけようと頑張るのに開けられない。

開けて上げるとどこから食べたらいいいのか悩む。

困った顔でこちらを見つめてくる。

——これは、これはいけません。今時の幼女じゃない。

大きな口をあけてぱくつと食べる真似をしてみると、真似してパクリ。

一口食べると目を大きく見開いてキラキラとこちらを見つめてくる。体を揺すりながらすぐに声を出したいのを我慢して食べきる。

「これなにこれなに？」

「シユークリームだよー」

「美味しいよ？ これいいよ。うん、捧げられるならこれがいいーこういうのがいい!!」

ぴよんぴよん飛び回りながら、中のクリームが垂れてくるのをあわあわとしながら舐め、幸せそうな顔をしている。

それを見て思わず笑みを浮かべる。

中のクリームを舐めながらじーつと見てくる。

「なまえはー？」

「ヒカリだよ」

「うん、ヒカリ。いい(こいいこ)」

頭をなでようと背伸びしてくる。

——なんか可愛いんですけど、ねえ、この子かわいいんですけど!!撫でようとするも届かない。正確には届けさせない。

笑みがこぼれながら、コンビニでもらったおしぼりを開ける。

口元を拭い、手を拭かせると、手がクリームで汚れていたことに気づき頭を下げる。

怒っていないよというと

「りぱー☆」

と笑った。

……この出会いがまさかあんなことになるとはお釈迦様でもわからないよね。まあ、再び出会うのは少し後の話になるんだけど。

く岩永静ちゃんの場合く

「ヒカリ？ なにをして」

「しずちゃん!!」

ヒカリを発見したが、何をしているのだろうか？　しやがみこんでシュークリームの袋を開けている。

こそつと食べるような代物ならプチシューにしたらいいのに。

「この子にね？」

「んん？」

耳元でりぱーっ☆と声がする。驚き横を見るが何もいない。

「どうしたの？」

「な、なんでもないってうわっいつのまに」

ヒカリのそばに幼女がいた。10歳ぐらいの女の子。シュークリームをパクつきながらキラキラとした瞳でこちらを見ている。可愛らしい。

さつきまで見えなかった気もするが、誰なのか？

「あー、見えちゃったの？　しょうがないなあ。お姉ちゃんは」

幸せそうな顔をしてこちらを見つめていたが、すぐにシュークリームを爛々と見つめる。

今の重要なのはこつちと言わんばかりだが、妙な眩しさが見えるのは成長した証なのか。

——それとも……それとも汚れてしまったのか……

大きな口を開けて食べては中のクリームに苦戦しているのを見ると何か小動物めいてて……

「この子迷子みたいで。シュークリームあげたら反応いいの」

「……もしかして餌付け中？」

「そう」

ヒカリも満面の笑みで笑顔全開。この眩しい生き物たちはサンダラスが必要ね。

ヒカリがじーっと見つめてくる。それに気づいて女の子もじーっと見つめてくる。

「えー、でももってるのって……スポーツドリンクぐらいしか？」
「じゃ、それで」

ヒカリもノリノリで次の反応が見れると喜んでる。
「はいどうぞ」

「りぱーっ☆ えーと、これなに？ お水？」

まるでペットボトルを持ったことがない人の反応をしてくる。

——なにこの子……今の子らしくない……

わざとか？ 演技なのか？ いや、これは多分素……

「ね、面白いでしょ？」

いやまて。今の時代そんな子が存在するだろうか？ いやない。

もしも？ もしも、この行動が素なら……天然記念物！

頭を振りながら我ながら馬鹿な考えを左から右へと流す。

「えええ……これをくるくるっつとひねってみ？」

「？」

「いやだからこうやって」

くいつくいつと回す素振りを見せると同じようにひねって見せる。

「おおー面白いー玩具っばい」

口つけ飲む仕草をしてみると同じように真似をする

「……ヒカリ」

「……なに？」

ふはーっつと声上がる。

「誘拐じゃないよね？」

「えー」

時間は夜10時。今時の高校生でも帰宅する時間帯。まあ悪い子は知らないけど。

「家どこ？」

「家？」

「そう、家」

家かーと考えている幼女。まさか、この子、家なき子？

こちらの気持ちを知ってか知らずか、いい笑顔をして言う。

「んー、じゃ、帰るね」

りぱーっ☆

笑いかけると駆け出していく。

「気を付けて帰ってね〜」

「って一人で大丈夫なの〜?」

だいじょーぶーと声が聞こえた気がしたが、すぐに見えなくなつた。

残された二人は「今度はいつ会えるんだろうね?」と笑い合った。

く岩永静ちゃんの場合2く

昨日あった静って子がまた走ってる。

薄暗い中、運動場でスタートの練習をしている。

わっちとしては、どうしてそこまで頑張れるのかよくわからない。だから見に行ってみる。

「……」

黙々と確かめるようにしている。その姿は必死にすら見える。

死ぬわけじゃないのに。どうして頑張れるのか。

わっちにはわからない。

でも悲しくなるのは気のせいなのか？

近くにおいてあるタオルとスポーツドリンクを握ると近づいてみる。

……

……

……

……気づかれない。

もっとスムーズにもっと速くという思いが強い。こちらに気づかない。

仕方がない。耳元で

「りぱー☆」

と囁いてみる。

ビクツとしてこちらを凝視する。

「な、なんだびつくりした。昨日の子じゃ？」

「休憩!!」

「え？」

「きゅーけい。頑張りすぎ。や！ す！ めえー」

「え、ああ、もうそんな時間？」

タオルとスポーツドリンクを飲みながらしばらく足踏みをする。

座るように服を引っ張るが

「すぐに座ると痔になって大変なことになるので待って」

「？」

「わかりやすくいえば」

真顔で指を立て満面の笑顔を向ける

「お尻から血が出る」

「!!」

それは大変なこと。絶対にあってはならない。

思わずわっちのお尻を抑える。首をふるふると横に振る。

「捧げられる血は多いけど、そんなところは駄目絶対」

「なにそれ……？」

「こつちの話」

しばらくして静は座り込み、またスポーツドリンクを飲む。

あれは美味しかった。水なのにあんなに美味しいのがあるとか凄
いと思う。でも一度捧げられたのだからねだってはいけない。

「はしるのつらい？」

「いいや、何も考えなくてすむからいい、かな」

「そっか」

「どうして走るの？」

「えー、あー、んー、まあ、好きだからかな？」

複雑な感情が流れ込んでくる。褒められて嬉しかったこと。もつ
と褒められたいこととかも。

子どもに言うことではないというのも流れてくる。気を使われた
のかな？

まあ、幼女だから。この体じゃしようがない。

運動場に寝転がり星を見ている。真似するように寝転がって見る。

街の明かりにも負けないように星が瞬いて見える。

「いいね。お空」

星が瞬いている。都会でもほんのり見える空は悪くない。

「そうだね……」

「汚れるけどね」

「そうだね……」

風が通り過ぎていく。時間が過ぎていくのも悪くは……

「つてまった!! どうして幼女がこんな時間帯で一人でいる!!」

「え、今更?」

「まって、すぐに帰る用意するから。送っていくから。いいね、そこから逃げないですよ?」

「ええええ」

「駆けだしていく。速い!! この速さ、逃げても追いつかれるんじゃない?」

「——それより、わっちはどこに帰ればいいのだろうか……」

「……」

「……よし。逃げよう!」

「——夜の街を駆ける二つの影。」

「わっちと静の追いかけっことは30分ほど続いた。」

「……きっちり捕まって、宿代わりに使っている近くまで送ってもらった。やっぱりこの体だと無理……」

〈星野理也さんの場合〉

バイクの端に不思議なものが見えた。慌ててバイクを止める。見知った顔、そして得体のしれない、いや幼女の姿をした何か……

「ほーら、ぷちしゅーだよー」

「小さいー小さいーふわあ」

ぴよんぴよん跳ねるごとに白髪の手がふわふわとしている。

そんな光景だと言うのに汗が噴き出してくる。本能が語ってくる。あれは普通ではない……

——なんでそんなのにかかわっているの二人共おおお！

不思議な幼女の形をしたそれはプチシューの魅力の前に喜んでい

る。
ヒカリたちからは、可愛らしいと思えない反応を示す食いしん坊生物——幼女としか思えないのだろう。

ヒカリも静もそんな幼女の反応を微笑ましく見つめている。

——わ、わたしがどうかしない……

理也は覚悟を決めてヘルメットを脱いだ。

バイクが止まり、長身のお姉さんがヘルメットをとるやいなや話しかけてきた。

「な、なにしてるの?」

異様な光景を目で見ているような、引き気味に、恐怖を抑えながら。

「りぱー?」

ビクツと反応する。

「あ、りっちゃん」

「りーや、またバイク? 走ればいいのに」

「今はこっちがいいんだよ。で、なにその子。ま、まさか二人の子?」
静は手でないないと手を振るが、ヒカリは何か考えている。

なるほどそれもありかと意味深な声が洩れているが、気にしたら負けだとシラノちゃんは思う。

「いやあ違うんだなあこれが」

がっかりしたような顔をするヒカリをあえて見なかったこととする。

「この子を見たらついつい餌付けする習慣が」

「習慣って……」

目と目が合う瞬間、りっちゃん？　リーヤの顔に何か怖れが浮かぶ。

——あ、この人、わかっちゃうタイプだ。

普段から怖い話やそういうことが気になるタイプだとわかる。

シラノちゃんはそういうのには好かれやすいのだが、同時に怖れも抱かせる。

怖れ？　畏れかも？

「わっちは怖い何かじゃないよ？」

「えー何？　幼女が怖いのか？」

「そそ、そんなんじゃない！　けど……」

りぱく☆と笑顔でリーヤのそばへ行き、手招きしてしゃがませる。生唾を飲む音がした。

「んじやなにか捧げたらそれでおしまい」

かわいらしくにぱーっ☆と笑いかけるが、さらなる緊張でもって返してくる。

「血とか体の一部とか？」

小声。畏れ度200%を越えている。泣きだしそうなのだがどうしよう。

「美味しいのがいい」

「ま、まさか血肉を所望？」

そういうのは儀式で間に合ってるし……

「お菓子持ってる？」

ヒカリが助け船を出す。

「ジュースでも可」

静はペットボトルを振って見せる。

「コーヒーしかないよー」

あわあわしている姿がなかなかかわいらしくそして面白い。

「ほっほっほっ、そこにコンビニがあるじゃろ」

静も助け船を出す。何故かないアゴヒゲを撫でながら仙人風な言い方で。

はつつとした長身のお姉さん。バイクを急発進させ、中に入っく。

短いところでヘルメットしないと怒られるよーと声は多分聞こえていない。

しばらく待っていると、静もびっくりするスピードで走ってきた。ずばつと差し出してくる。

「お納めください」

「うん、ありがとっあつっ」

受け取ると、あまりの熱さに取り落としそうになる。

静が受け止め、ヒカリが覗き込む。

「まさかの肉まん？」

「あんまんじゃないところがりーやのいいところかな」

「いいじゃないか。美味しいんだから」

りーやは声を上げる。

——なるほど、美味しいのなら試さなきゃいけない。

期待と、未知との味に期待で心が躍る。

だが、熱い……

何度も取り落としそうになりながら、それを二人がカバーしながら、その様子をハラハラとした顔をしながら。

ようやく袋をはがしてほかほかの白い塊、肉まんを見る。

袋は紙だから食べられない。裏にも紙があるのを確認すると剥ぎ取る。

「ヒカリ、静ーふーふーしてー」

「お願いはっ」

胸を張り、ヒカリは急に姉の貫禄を見せつける。静もにこにこして

る。りーやだけがそういうのはと言うが、にぱー☆つと笑って見せる。それだけで黙ってしまう。

「お願いしますヒカリお姉ちゃん、静お姉ちゃん」
「教えられた言葉をそのまま返す。」

「うん。よかろう」

「ヒ、ヒカりはなんで偉そうなの」

へへへくと笑っているヒカりに、リーやはあわあわとしている。
そんなことして大丈夫なの？ と心配そうにしている。

はむつと一口。口の中に広がる暖かな感覚と細切れの肉の味。

きらりと光る瞳を見たりーやは一瞬怖れを失った。

これはお菓子というよりお饅頭の一種だと理解する。

ふーふーと小さな口で吹きかける。中も結構な熱さでよい。

ふーふーしてまた一口。ふーふーして一口。

小さな一口ごとに幸せになる。

「ふあああ〜」

満足げな声を聞いて食べている間に三人とも笑顔になっていた。

先ほどの畏れはどこにいったの？

「美味しかったー。肉まんいいよね肉まん♪」

「よろこんでもらえてなにより……」

自然と頭をナデナデされる。首をかしげてリーヤを見るとはつと何かに気づく。

一瞬やってしまったという顔をするが、最初から気にしていない。

「もつと撫でる？」

「い、いいの？」

「許す。もつとするといい。美味しかったもの」

「よし、私もしよう」

ヒカリも撫でまわす。

リーやは警戒半分残したまま、微妙な距離感で撫でる。

うむ。人間との関係は最低でもこれでいいと思う。

儀式する人たちがいなければこれでいい。

んだけどね〜。

番外・本編の奈々乃さんところにシラノちゃんたちが
行ってみたく

2021年1月07日

奈々乃さんが大暴れしました。

あんたのせいだ隠れるなど騒いでます。

警察がきたり辺りは騒然。玲子さんもなんか虚ろな感じでした。

——これはいけない。

わっちはシラノちゃん設定年齢11歳。都まんじゅうの人たちに
シュークリームとか捧げてもらった恩はあるけど、これは見過ごせな
い。

行きましようか。リーぱーちゃん10歳！

「でもいつていいの？」

「リーぱーちゃんは何もしてないしツイッターできないもの」

カタリはいけないと思うのです。シラノちゃんはそういうのは駄
目。

実際捧げるとか崇拜するとか書いてあるけど来た試しなし。

「とりあえず落ち着かせるの。まずは奈々乃さんから」

携帯片手に虚ろな表情でツイートをみている。

多くのやめろという声とその中にまじってやっっちゃえの声。なに

よりいいねの数を見て暗い笑みを浮かべている。

間違つてなんかない……

「駄目だよ本当に」

耳元で声がする。

「だ、誰？」

声をあげるけどおそらく見えていない。

だって笑いかけてないもの。見えるはずがない。

霊感ない人でも聞こえるようにするのは難しいけど、二人なら大丈夫。
夫。

「それじゃ思いのツボだよー」

今度は背後から声がする。リーパーちゃんは心配げだけど「なに、なによりパーは本当に？」

気づいていない。いや気づく余裕すらないのだ。

「違うよ？」

「違うけど違うよ」

ああ、混乱させちゃうけどリーパーちゃんは素直。

「なに、これなんなのよ!!」

頭を抱える。

「おちつけー」

「おちつけー」

「なんなんのよおおお」

ぐるぐるまわりながら奈々乃は怯えた声を上げ続ける。

ああ、どうしても落ち着いてくれない……

いつそ姿を見せたほうがいいのか？

「なにしてるんだい？ 奈々乃？」

ドアが開き、尋ねてくる一つの声。

思わず動きが止まりそちらを見てしまう。目があってしまう。

「おばあさま」

何かに焦った顔をする奈々乃に

「変な子だねえ。お風呂いっついで」

「……はい」

ふらふらーと出ていくのを見送る。

おばあさんはずーっとこちらを見つめたままでももむろに

「いたっ」

「いたい……」

拳骨落とされた。

「あまりいじめるんじゃないよ馬鹿者」

額をデコピンもされた。痛いとかどういふことなの？

どうして今の私たち触れないはずなのにこのおばあさん……

「だけど少しは人の話を聞けるようになったらええんだがねえ」

手招きしながら呟いてる。

「今日のところはおはぎは食べてかえんな？」

「はい」

「あい」

よくわからないけど、逆らったらいけないのっっているんだなあとおもいました まるっ

番外 本編の『玲子さんの汚点』でつちあげ前編

お婆様が交通事故に遭った。その知らせは青島家に衝撃が走った。家族の多い青島家で祖母の存在は大きい。家を守り、弟たちの面倒を見ていたお婆様の交通事故と入院は生活を変えざるをえなかった。弟たちの面倒を見、食事を作り、祖父の面倒を見る。それだけでも重労働だ。

祖母の病院にも足しげくいかなければいけなかった。

受験どころの騒ぎではない。

祖母は「大したことないって勉強しな」と笑うが、残念ながら放置できるほど器用な性格はしていない。

困った子だねえと笑うお婆様は「埋め合わせはする。でーじょうぶだ」と笑っていた。

……両親が共働きな以上、家を守るのは玲子しかない。

台所には立たない祖父の注文は厳しい。

手伝いをする弟たちにも無理はさせられない。

姉としてどうかしなきやいけない。

最後の追い込みの勉強ができなくなるが、一番問題なのは精神的なことだ。

ブレやすいその性格はもうどうしようもならない。ここ一番の度胸の無さは

心の弱さはもうどうしようもならない。

あのお婆様の血が玲子の中でもう少し濃ければ笑っていられたのかもかもしれない。

全てを飲み込める胆力があれば……

そして――

高校受験は失敗した。

目標だった高校には届かず、滑り止めの六泉ヶ丘高校は通った。

そのことでこちらの事情を知らない人たちが陰口を叩くのが耳に入る。

――ああ、煩わしい……

先生方には事情を知っている者もいたが、当然知らない先生はネタにする。

それを咎める気はない。ただただ――
玲子の中にそれらは蓄積していった……

六泉ヶ丘高校に入学する季節になった。お婆様は無事に帰ってきた。

もういい歳してるのだから、大人しくなってほしい。
そんなある日。

「玲子や」

お婆様がポンと封筒をくれた。

「これは私からの、埋め合わせだよ。私の全てをおまえにやる」
「……お断りします」

封筒を押し返す。

「いや返すな。おまえにや悪いことをしたと思ってるんだよ」
「……そういうのは気持ちだけで」

「いやそうはいかない。遠慮はするな」
「……いや、でも」

玲子は嫌な予感があった。このお婆様の全てとは、アレのことだ。
アレに関わることだと思いついてしまった。

「なら家長命令だよ。玲子。受け取りな。そして……」

家長命令。それは青島家が代々守ってきた家訓。

家長の命令は絶対遵守。すなわち絶対命令権。

普段何もいわないお婆様は伝家の宝刀を抜いてみせた。

お婆様はにっこりと笑う。

「ちよつと、バイクに乗れるようになってきな」

うちのお婆様はいろいろと破天荒すぎる。ふらつと旅に出たと思えばバイクで京都まで行っていたとかザラで。

いい歳しているのにバイクを乗り回す。改造するのも楽し気。運転も大好きのようなだ。

しかしその結果が受験で大変な時の交通事故。
さすがに勘弁してほしい。

「行動範囲が増えれば、それだけ見える部分も増えてくる。誰もが同じものを見えやしないが、見える先の風景はおまえを変えるさ」

……そういうわけで手に入れた自動二輪の免許である。

……そのお金を家計費に回せば少しは暮らしも楽になるだろう。だがしかしお婆様は年金は渡せども青島家の資産は余程のことではないかぎり使わせなかった。

お婆様所有の車庫の中には二台のバイクが置いてある。

乗っているバイクはアメリカンバイク。メーカーやはよくわからない。

ただ群青色に輝く色に惹かれた。落ち着きのある深い青を見るとお婆様は無言でいじり出す。

見て覚える。目で盗む。体で覚え込む。重い車体も起こし方も自然と身についた。

一通り覚えきると、今度はお婆様とバイクを走らせる。

気が付いたら離されていくのだ。乗り方にコツがあるのか。玲子は考える。

頭の中でイメージするも、体と馴染むのにはやはり時間がかかった。

やさぐれていた心にバイクはよく馴染んでいた。山を走り、風を切り、峠を走り、いつの頃か。悪くない気持ちだった。

だが、荷物、本を運ぶのにはやや問題がある。

——できるかぎり、安全運転を心がけている。慣れればなれるほど速度が上がっていくので自制も兼ねているのだが。

バードウオッチングに行くのにもバイクは役に立つ。

こういう状況だからか。いや、たまたま偶然だったのか。

——相棒にあった。

く番外 本編の『玲子さんの汚点』でつちあげ中編く

山へ向かう道。その人に出会った。

その人を後ろを追いかけける形で走っていた。

初めて見た時から何処かで見たような、古い友人のような感じだった。

バイクの乗り方からだろうか？ ライン取りも、所作も、誰かを真似するかのよう。それでいて何者よりも速く走ろうとする無駄のない動きにも思えた。

——誰かに似ていたからだろうか。

祖母がVサインする姿が浮かぶが、まさかね？ と肩を竦めた。

しばらく走ると、その人は減速し出した。

何か気になったのか、ハンドシグナルを送られる。

先に行けと。

何とも言えない顔になるが、その通りに先を進む。

追い抜く時にその人を見る。やはり女性だと思う。

外側が黒で、内側を暗緑系の色をしたバイク——車体名はわからないが——を横目に走り抜ける。

登りは勢いよく走っても事故することは少ない。だが下りは気を付けたほうがよさそうなこの道を何度も走った。

自然とグリップを握る手に力が入っていく。カーブが楽しい。

風を切る音が心地いい。自然と口から言葉が溢れる。

好きな本の一説。

ああ、今、開放されている気がする。

前を走る人は何といえればいいのだろう。全身から喜びが溢れているような走りをしていて。

先にいかせ、のんびりいこうかと考えてはいたが、後ろを走りながら、何かよくわからないものを感じていた。

それはバイクの乗り方にも表れているようにも思えた。

その人は私があったバイク乗りに近い乗り方をしている。

——よく似ているのだ。

今年になって事故つたと聞いていたが、それ以降、会うことはなかった。

ただこの人は速く走ることが好き、というわけではないらしい。時々、自制するかのように定速に戻すが、動きが跳ねているのだ。実際跳ねているのではないが、心が浮いているかのように感じる。速度がまた上がる。

鬱積したものを発散させながら乗る、暴走族や走り屋ではない。

だが、その動きは目を引いた。気になる程に……！

……おいまして、そこは駄目だ！ あー、入っていくのか？

ああ、もう仕方がない……

慌てて後を追いかける。ここは奴らの縄張りでもある。この時間帯だと……

あいつらの餌食にされるのは駄目だ！

……目的地についた。ついたのだがすぐに帰りたくなった。

自販機の前に数名座っている。改造バイク、暴走族が乗るようなバイクだ。

絡まれたくないなと思いつつも遠くに止める。

ここから山に入れば目的地はすぐだ。

「なんだおまえ」

「え？」

気づいた人たちは眉をしかめたまま近づいてくる。

早速絡まれたのか、ゆつくり近づいてくる。

ガムをくちやくちやとさせながら、逃がさないように。横に広がるように。

「いかしたバイク転がしやがって、おまえここが誰の縄張りか知ってて止めやがったな？」

「いい度胸だ。ん？ こいつ女だぜ？」

「へえ、ますますもっていい度胸だ気に入っ!？」

言葉は途中で遮られた。

急加速してきたバイク。タイヤを滑らせくるとターンしてみせる。

慌てて暴走族の人たちは後ろへ下がる。

「あぶねえ、何考え、おまえは!?!」

シールドを上げる音が聞こえる。

「あいつだ、謎の女が出たぞ」

謎の女?

「だとしたら、奴の仲間か」

「ヘッドに報告だ」

ハンドシグナルで先に行けと合図を送られる。

慌てて走り出す。エンジン止める前で、ヘルメットを取る前であったかと思いつながら急発進させる。

「あ、まて」

後を助けてくれた人も走り出す。すぐに追い抜かれ、先導するように進んでいく。真似るように後を追う。

風とタイヤを擦りつける音、巧みにカーブを曲がる。

下り坂の時に加速すると最悪事故る。特にスピードを出そうとする時は気をつけないと。

後ろでガシヤンと音がした気がした。後ろを確認する余裕はない。だがおそらくは……

心の中は逃げないと先を急ぐ。もっと下調べしておけばよかった。ああいう人が関わって来るとか想定外だったのに。

山を下りるまで一緒に走ったが、Uターンして帰っていく。

お礼言いそびれたと思いつつも、今日は帰ることにした。暴走族はやっぱり怖い。

暴走族のヘッドがやってきた時にはもう既に謎の女はいなくなっていた。

「沼山あ。手紙渡してこいやー」

「またつすか? って今回は普通の詫び状つすね」

「読むな馬鹿野郎! あとおまえらー、追いかけるんじやねえ。これ

以上、借り作りたかあねえんだよ」

「この下りは速く下りようとする事、事故りやすいポイントがいくつかある。」

「見事に追いかけた二人がこけ、Uターンしてきた謎の女が助けくれたのだという。」

「ほんの少しのやりとりだったが、彼らにしてはそれだけで十分だった。」

「あっし、惚れやした」

「あれで喧嘩も強いとききますぜ」

「黙れ、馬鹿者。俺が告るって決めてんだ」

「それなら手紙とか自分で渡せば」

「殴られる。沼山は笑う。ああいう女は貴重だが――」

「……いったいそれを守ったのは何者だったのか？」

「謎の女に謎エピソードが追加されるのであった。」

番外 本編の『玲子さんの汚点』でつちあげ後編

……それからというもの、バイクに乗ると……

「いたぞー！ 例の女だー」

……どこからともなく暴走族の人たちと鉢合わせになることが増えた。

追いかけるようについてまわる。どうにか路地に入り、やり過ごし、全力で逃げる。

おかげでバードウォッチができていないことにも気づいてしまった。

謎の女の話も少しだけ耳に入るようになった。

学校で……

平塚市、特に六泉ヶ丘高校ではそっち系にも耳聡い人がいるらしい。

「謎の女総長が爆誕したって」

「なんだそれ？ 暴走族情報？」

「ほら、最近暴走族のヘッドが一人の女性にご執心だって話あったじゃないか」

主に男子が噂話をしている。手元にバイクの雑誌を広げて脚を組みながら話しているのが耳に入る。彼ら声大きいから聞き耳する必要もない。

本を読みながら、助けてくれた謎の女のバイク乗りを思い出す。もしかすると王子様なのかもしれない。と考えながらも……

お婆様が手ほどきした人かもしれない。そうだとすると、迷惑もかけている可能性もある。できれば話をしたいものだけど……

「青いバイクに乗っている人を中心に暴走族が群がっているの、みたことね？」

「あー知ってる知ってる。アレか。謎の女総長」

(青?)

あの謎の人のバイクは外側が黒の、内側を暗緑系のバイクではな

かったか？

いやまさかね？　　と思いながら聞き耳を立てている。

「ほら、この前就任したあそのこのヘッドが猛烈アタックしてるって話」
「謎の女も最近目撃情報少ないって話だったよな」

「こんなこともあるうかと」

懐に何かを隠して出てくる眼鏡の男子生徒。名前は知らない。

「写真部！」

「こういうものを用意致しました」

写真を数枚。ズバツと出しておおーと歓声を上げる。

「証拠写真キター」

少し見てみたいが、さすがにそういうキャラではない。

「へえ、これが？」

「焼き増しは？　　というかこの碧のヘルメット、色塗ってるのか？」

碧？　　あれ？

「バイクは特定できそうだが、改造は、最低限かな？」

「いや、これ、スタイルだけでも特定可能じゃね？」

は？　　今不思議なことを……

「これだけだとかなりスタイルがいい。誰か各高校のスタイルと可愛・美人辞典作ってただろ？」

「……いや、同年代とはかぎらないだろう？　　歴代のをもつてこーい」

「資料だ、資料をもつてこーい」

「いや、俺が、俺たちが資料だ！」

……駄目だ、この男子高校生。早く何とかしないと……

風が吹く。男性の悲鳴が上がる。数枚の写真が飛ばされた。その写真の一枚が玲子の机のそばに落ちる。

拾い上げようとして、体が硬直する。

「あ、青島さんありがとう」

「え、ええ……」

そこにはフルフェイスで顔を隠したライダースーツの人と群青色のバイクと数台の暴走族が乗るバイクが写っていた。

(待つて待つて待つて？ 総長つて私のことなの？)
今日はもう帰る。なんかもう頭がぐるぐるしていけない。授業も頭に入つてこない。

総長と呼ばれるようなことは一切していない。鉄パイプもつてA
KIRA? の真似したり、日本刀もつて暴れたりとかしていない。
そんな乱暴なこともしていない。ただ全力で逃げていただけ……全
力……法定速度違反！ 信号無視！

いや、大丈夫大丈夫。カメラや警察の前ではしていない。大丈夫。
バレていない、バレてなんか……

「青島さん？ 聞いてる？」

さすがにそれはない。いや、これ身バレの危険性？ スタイルで判
別可能な変態がいるのなら？

本当にバレる可能性だつて。いやヘルメットはとつていない。大
丈夫、セーフなはず。

いやいつ写真とられるかわかったものじゃ……

財布的にもヤバいしガソリン代高いから、しばらく自粛もしくはや
めておかないと……

「聞いてないね？ 仕方がないな」

不意に肩を掴まれ強引に振り向かせられる。何事？

壁にドンとされる。長身の、カツコいい？ 女性がいた。

同じクラスの、不登校の人。何度か見たことあるけど、確か星野
……？

「総長玲子だね？」

耳元で囁かれる。頬が赤くなっている自覚が出る。これが噂に聞
く王子様かく！ 脳内がフルスピードで今の描写つてどうなってい
るのかと拍車がかかる。

「ちが、違います！」

かろうじて出た言葉。だけどこれじゃ半ば自白したような反応
じゃない？ 待つて待つて。

思わず周りを確認する。幸いにも人はいなかった、ように見える。

「違った？ 君がああのバイク乗りだと思ったから」
ハンドサインで先に行けをされる。

「違、いま……え？」

「まあいいけど。少し手伝ってほしい。主に勉強関連で」
それが星野理也との出会いだった。

それからというもの何かとサボりがちな彼女をサポートすることに。

断ろうとすると……決まってこうなのだ。

「総長ーおねがい」

「だからなんで総長なのよ！」

……奈々乃は見ていた。

「総長？ 暴走族？ まって？ あの優等生が暴走族のトップ？
じゃ、それって？」

——勘違いが加速する。

……ヒカリは知っていた。

「あの写真よくとれてるよね？ でも口外は駄目かな？」
——ヒカリの人心掌握術が炸裂する。

……静は噂を聞いていた。

「？ 総長玲子？ 似合いそうだけど優等生なんですよ？」
——静の心配りがほんわか包む。

……いちごは——

「なにそれ、初めて聞いたー」
——無知は時に人を救う。

く森いちごちゃんの場合く

『喫茶店いちごもり』

両親がしている喫茶店はマンションの一階にある。その看板娘、店名にもあるいちごが時々働いている喫茶店は今日もいろんな人がやってくる。

彼女がいる時、彼女を一人前のマスター、もしくはウエイトレスに育てるべく押しかけるファンは少なくない。

「いらっしやいませ。ってどうしたの?」

今日は静が来た。二人の幼女と連れている。黒い一色の恰好をした幼女と着物を着た白髪の女の子。りぱく☆と驚きと緊張、そして期待に満ちた視線が向けられている。

「やつほー、来たよーいちごー」

元気のいい掛け声。両手に花つぽい。二人を押しして中に入ってくる。

「コーヒー屋さん初めてだよ? りぱくつ☆」

「はい、はじめてきました……りぱくつ☆」

二人共笑顔が可愛い。でもりぱくつ☆ってなんだろう……

「なに? 静ちゃん、もしかしてナンパ?」

「うん、そう。逃げようとするから捕まえちゃった♪」

「け、警察に通報しなきゃ」

「冗談冗談」

目が左上に泳いでいく。幼女二人にしゃがんで聞いてみる。

「どいつているけど本当のところは?」

「……捕まりました」

「……この私がまた捕まるなんて……」

「もしもし? ポリスメン?」

電話の子機を握りしめ、耳に当てる。それを必死に止める静ちゃん。
ん。

必死すぎて笑えてくる。

「まってまってー。二人にここの超お勧めしてきたお客さんだよ? 私

が全額払うんだから！　それが終わるまではくいちごマスター御慈悲を〜」

「え？　いいの？」

着物幼女が近くにいた常連の柏木さんに絡んでいく。こくりと頷くのを確認。

待つて待つて。どうしてこんなことになってるの？

「ああ、いちごも何かあげてみたほうがいい。絶対得するから」

「いや、損するだけじゃない？」

幼女二人がりぱーっ☆と輝く瞳を向けてくる。

「あげると聞いて！」

「甘い人と聞いて！」

……なにこれ、サングラスが必要ね……

いちごは二人の頭に手を置き諭すように話す。

「あーのーねー。働かざるもの食うべからずと行ってねえ」

「じゃ、お手伝いするー」

「エプロンもつてくるねー」

素直な反応されてキッチンへ入っていく。

すぐにエプロン装着して帰って来る。

どうして場所知ってるのよ？

「ちよっ、静ちゃんなんとかしてー」

「幼女の接客、いいじゃない？」

「店長が親指立ててOKだって」

「確認はばっちし」

うちの親も親である。

「ダメだ、この喫茶店。早くなんとかしなないと」

いちごは大きいため息をついた。

一時間ほど、彼女たちはいそいそと喫茶店のお仕事を手伝っていた。

注文をとり、危なっかしい足取りで商品を選び、店員と一緒にほつと胸を撫でおろす。常連の客以外の人は少ないが、そのうち多くが来

るに違いない。

看板娘たるいちごがいるから。燃え尽きるのも早いが、休みながらして慣れて行かなきゃ……

「いちごますたあゝ終わったよー」

「テーブル拭きおしまい」

着物幼女と黒服幼女はりぱーっ☆と終わったことを告げてくる。あとは二人への食べ物を用意しないといけない。

「マスター禁止」

「えー☆」

「パンケーキかホットケーキを彼女たちに」

常連の柏木さんが注文してくる。りぱーっ☆と笑顔で静ちゃんの席へ座る。

「んじやいちごのパフェとコーヒーのお代わり」

いちごはえーと声を上げる。

いちごが看板娘にいる時の特別メニュー。いちごが作るパフェのこと。何が乗ってくるのかは客はわからないメニューである。

「コーヒーって何？ この黒いの？」

「飲んでみる？」

「飲むー」

「飲みたいです」

すすつと飲んで何とも言えない顔をする。

静はにかつと笑って

「大人の味だよー」

「これは駄目です。絶対に駄目なやつです」

「これは甘い人の所業じゃない……」

ずずいつと怖い顔で迫る。その口に残ったパフェを入れる。と途端に

「ふわあああああゝ」

「りぷあああああゝ」

二人の幼女は眩い笑顔に戻る。

いちごはその様子を見ながらなんともいえない笑顔を向ける。

パフェは出来上がり。あとは出して同時に休憩するだけ。奥からボールを渡される。それだけでいちごはいいの？ と父親に向ける。

あの方法をしろと？ 受け取ると親指を立ててきた。小学生ぐらいの子をコーヒーマスターの魅力に落とさせるには最強兵器だ。ちびっこ共よ。我が喫茶店の、コーヒーマスターの魅力に全面降伏するがよい。

コーヒーマスターを少女たちの前に置く。何とも言えない顔をするが、無視をする。

スプーンを渡し、ボールの中身を大量にコーヒーマスターに沈める。それはぷかっとなんか浮く。

「ほら、すくって食べてみて？」
「!？」

少女たちは警戒する顔をしたが笑顔に向ける。少女たちは顔を見つめ、それを口に入れる。

「ななな生クリーム!!」

「お、美味しい!! 甘い!!」

『いちごますたーいい人』

「いちごマスターはやめて。ほーらホットケーキにも乗せちゃうぞー」

「ふあああああ☆☆」

「ぶあああああ☆☆」

二人の少女を見ながら静は言う。
「落ちたな」

それは誰に向けてか。生暖かな視線のまま欲しそうな顔をしている。

「いい、美味しいは正義。甘いは正義」

『甘いは正義、美味しいは正義』

「美味しいものはみんな食べる」

『美味しいものはみんな食べる！ 覚えた』

「よろしい。もっと食べて」
こうして二人の幼女に大事なことを教えるのであった

く森いちごちゃんの場合2く

夢を、夢を見ていたんです。

黒い服の幼女が私のような人と一緒に歩いてくるのです。

「久しぶり」

と言うのですが、それが誰だかわからないのです。

ただいちごと同じ制服を着て、同じ顔だけど双葉のペアピンが印象が強くて。そればかり見ていた気もするのです。

なんとなく幼女を見ます。

「りぱっ☆今のうちに遊ぶのです。時間は有限なのです」

その幼女はせっつくのです。満面の笑みで。

巨大なテレビ画面と、ゲーム機があるところへ誘われます。

よくわからないままゲームをするのです。本来ならやるべき時間を取り戻すように。

「楽しい？」

「んー、どうかな……?」

「あまあま、生クリームのコーヒーマウマ」

黒服幼女は生クリームが入ったコーヒーマウマの生クリームをすくい舐めてます。

相当気に入ったようで、コーヒーマウマが冷めた甘いコーヒーマウマを啜っています。

「もつと一緒だったかっただよ?」

「そうね」

下唇を噛んでしまいます。

「病気は嫌ね」

「そうね」

同じように返されてしまいます。

ああ、本当にこういう時間を楽しんでいたのだと思うと本当に理不尽に腹が立ってしまう。

よっしやあああとヘッドショットを決めると、再び静かになってしまふ。FPSというゲームは一喜一憂が多い。同じように撃たれて

しまう。死角から撃たれることも多い。理不尽な死が多い。

その死に慣れることはない。ただそれでも復活が早い。死なない。そうであってほしい世界だと思ってしまう。

「……うん、理不尽」

どれくらいだったのか。

その子はそういつてコントローラーを置きます。同じように置きます。

「もういいの？」

幼女は問いかけます。

「うん」

その娘は笑います。満足したかのように。

——いや……

全てを受け入れているようなその笑顔はずるいと思ってしまう。

「そんな顔しないで。いつもここにいるから」

胸に手を当てられます。その娘は驚きすぐに手を離し、じーつと見ている何かに気づいてペたペたと体を触り……最後に顔を流れている涙を拭いとってください。

「魅力的な体になってるなんて本当に損したよ。ボクもそうなれていたらと思うと本当に……」

「だって……」

貴方はもういないのだと出る声を飲み込む。悲しくなる。涙がこぼれてしまう。

「その子がここに連れてきてくれたの。リーパーちゃんは優しいね」

「甘い人は好きですよ？」

「そりや私の——だもの」

ああ、やはりそれを口にしますか。子どもの頃の一番古い記憶が蘇る。これは両親すら教えてくれなかったこと。私たちが喧嘩したりしたこと。

「——私が」

「お姉ちゃんなんだから——」

明け方近く、光が届かない闇の中で口にして起きた。涙が流れている。

悲しくも嬉しい夢を見た。今はもういないあの娘が成長した姿で来た。

一緒に遊んだ。もっともっとあの時からずっとそういう日があったはずなのに——

頬を抑える。今日も一日が始まる……

あの娘の分も頑張らないと……

……できる気はしないのだけど……

く青島 玲子さんの場合く

本から目を上げると、いつのまにか小さな子がいた。

黒い服をきた子。いつのまに入ってきたのか。気づかれないほど集中していたのか？

普段着代わりの着物が着崩れないように整えながら、どうしたものかと視線を一切そらさない。

まだ日は高い。本が読める。

のだが……不思議と視線をそらしてはいけない……そんな気がしてしまった。

じーつと見つめてくるのでこちらもじーつと見つめてみる。首が少し傾けるので同じように傾けてみる。

——どうにもこの子、犬っぽい。

「り……」

お互い見つめ合うことしばし。

「り、りぱく☆」

照れて赤くなって顔を背けた。よし、勝った。

小さくガッツポーズをする。

猫科は目を見てはいけないが、犬は目を合わせることが大事。そらしてはいけない。

それでもじーつと見つめてみる。

照れてもじもじとしているその横に、手探りでそれを掴み、それをすーつと横へ移動させる。

何かと思いきその子の視線が視線を追う。

手にしたもの、それは今日のおやつ。手作りのどら焼き。

それをおもむろに自分の目線に合わせてみる。

首を傾け目で語る。

——ほしい？

こくこくと首を縦に振る。

につこりと笑い差し出す。

受け取り、いいの？ と視線を向けてくる。

今度はこちらが首を縦に振る。
りぱく☆といい笑顔。そして一口パクつき、さらに目を大きく広げてくる。

つぶ餡の和菓子店風に仕立ててみた逸品。この味に慣れたら他所で食べるなどという愚行は

できない。自信作である。

うちは材料は庭で作ったりできるものもあるが、こと甘味に関しては苦労が多い。

うちの子たちは食べたがるし、甘味を用意するのは難しい。それでもやりくりしてどうか

自作するぐらいはする。スナック菓子の再現は難しいがポテトチップスならできるし、

ホットケーキの応用をすれば(ホットケーキミックスという贅沢品は稀だが)できなくもない。

お菓子が欲しいか? だったら作れである。

視線に気づいたのか、食べていた黒服の子は何か気づいたようで、半分に割って差し出して

きた。実はほしいのでは? と考えたらしい。

「いいですよ、食べても」

「でも……」

「うちは食いしん坊が多いからはやく食べちゃいなさい」

ちゃんと笑えているかどうかは自信がない。甘いのが嫌いなわけではないのだ。

「恩返しはちゃんとするから」

「子どもはそんなこと考えなくてもいいの」

頭をなでなですると、本に視線を下す。

物語の中に没頭している合間に、その子も姿を消していた。

——— 面白いえば名前とか聞いてなかったけど、どこの子なのかな?

その日の夜の話。

リーパーちゃん(10歳)は運営ちゃん(8歳)の元へやってきて

いた。

「運営ちゃん……」

「はい。ガバってませんよ。ってあ、危ない!! どうしたんです?」

死神の鎌を構え、本気の目を向けている。

「青島玲子さんの家をもう少しよくしてください」

「は? そんなことできませんよ。何があつたんですか、ちよつ、鎌振るわない」

必死になつて避けながらあらゆる書類が切断されていく。

「さすがに可哀想になつてきましたので。しかも私、死神なのに……」
涙を流しながら振り回すリーパーちゃんの姿があつたとか……

く三嶋先生の場合く

じりじり、じりじり

後ろへと退きながら、その圧力を感じていた。退いた分、詰め寄って来る三つの影。

「ま、まて。話せばわか……わかる……」

三嶋先生は箱を後ろ手に後ろへ下がる。だがそれ以上はいけない。壁まで追い詰められていた。

どうしてこうなった？ 三嶋先生は涙目になっている。

「りぱー☆」

「りぱー☆」

「りぱー☆」

三つの声ができる。その姿が鮮明になるが、話してすむ相手ではないと直感的に理解した。

シラノちゃん、りーぱーちゃん、運営ちゃんに囲まれ、三嶋先生は首を横に振る。

「こ、これはあの子たちの差し入れなんだ。君たちに上げられる個数はないんだ」

『嘘だ！』

一斉に声が重なる。圧倒的断言力に三嶋先生は怯む。

「しってるのよ？」

『ドーナツ三嶋様』

再び声が重なる。ドーナツ三嶋、差し入れがある時は大抵がドーナツだと拡散された。その情報は一気に全校生徒にまで広まった。

そしてそこから

『逆さに吊り下げれば出てくるって知ってるのよ』

と噂が流れていることも……

悲鳴が上がる。

「せんせい、どうした……なにがあってるの？ 貴方たち」

バンドの練習も一段落して休憩してきた奈々乃の目に飛び込んできたのは、ぐるぐるまきにされた三嶋先生と、ドーナツを食べる三人

の幼女の姿だった……

「た、たすけて……」

「三嶋先生が？ さすが先生。小さな子にも優しいー」

「え、あ、ん、いや、そうだろうか？」

生徒にはカツコイイ風に思われたい。先生なら思い浮かぶ第一の理由ではあるが、ぐるぐる巻きにされていてそれはない。

だが奈々乃は三嶋先生のことをカツコイイと称している。この異常な状況においてもその評価が揺らぐことはない。彼女は頑なだから。

「それじゃ劇団のほうにいつてきますーさようなら三嶋先生」

「はい、おつかれさま。がんばれ未来の女優サン」

「やだ先生ったら気が早いー」

笑顔で帰っていく奈々乃を見送ると、ハツツとしてしまう。

普通に助けてもらうべきではなかったのではないか？

かっこつける暇はなかったのではないか？

三人の幼女がこちらを向く。

「ま、まて。話せばわかる」

「何を話すの？ りぱー☆」

「甘い人は大好きですが、貴方容疑者だから？ りぱー☆」

「えーと、まあ、白判定されるといいですね。りぱー☆」

「ちなみに今の判定は？」

震える声で尋ねる。彼女たちは

「グレーです」

何処調べの情報かはわからないことを満場一致の意見として言うてのけた。

「おれはむーじーつーだー」

「言い訳は地獄で聞く」

「地獄ってここですよ？」

運営ちゃんはきっぱり言い切る。三嶋先生は何とも言えない顔で運営ちゃんを見つめる。

「そんな顔しても無駄です。ですが、そうですね。平塚は地獄です。」

あの時からこの時まで」

冷めた、小悪魔な笑みを浮かべながら運営ちゃんと言う。

「お、おまえたち、ボクを、この三嶋先生には何をしたっていいと勘違いしてるな?」

せめてもの抵抗と言わんばかりに声を上げる。

「え? 違うんですか?」

「え? そうなんですか?」

「え? そこ疑うんですか?」

この際だから情報源を聞き出しちやると言わんばかりに三嶋先生は尋ねる。

「う、疑うさ。いったい君たちに吹き込んだのは誰だ!!」

手が出たのなら指を差していただろう。三人の幼女はりぱく☆と可愛い笑顔を浮かべる。天使のような何かにか見えないのだが発言は意味不明である。

「Discordのお兄さんお姉さんたち」

「凄く物知りで暗号得意な面々です」

「優秀と変態は紙一重と言います。わかりましたか?」

よくはわからない。だが、彼女たちの背後にはとんでもない人たちがいることだけはわかる。ここは全面降伏したほうが吉。

「……わかり、ました」

項垂れ崩れ落ちる三嶋先生。

幼女たちは満足したのか、さらにじりじりと間合いを詰めてくるのである。

「えーと……う?」

劇団あかぐまの練習が終わり、休憩室で団欒の予定だったのだが、奈々乃の目に飛び込んできたのはスマキにされた三嶋先生と空のドーナツの箱だった。

く校長先生の場合く

「じー」

その少女と視線があつたのは車から降り、しばらくしてからのこと。

白髪、着物の少女はこちらを見つめ続けている。いつあつたかは定かではないが、これが初めてではない。

「……」

見つめ返す。しばらくそうしていると、おもむろに空に指を上げる。

少女の視線が指のほうへ向く。

ふわああと声上がる。空には虹がかかっている。そちらに興味があつたのか、少女は動かない。

にやりと笑うと歩き出す。少女はついてこない。

いつもの喫茶店に入り、いつもの窓際に座る。

コーヒーが運び込まれる。一口啜り、メニューを見る。

メニューを持つ手に刺す感覚が生まれる。

グレーになった髪をかき上げる。メニューを降ろすとさつききの幼

女が強い視線と共に座っていた。

少女の視線にさらされながらコーヒーを一口。

視線を窓のほうへ向ける。

視線の方向にはいつもの光景が展開されていた。

三嶋先生が吊るされているのである。一度目は思わずコーヒーを吹き出したのだが、二度三度続くと耐性ができてくる。

この位置からはその一部始終が見れる。

ドーナツを奪い取られまいと守りながら劇団あかぐまへと差し入れをする最中、少女たちに襲撃をかけられ、ドーナツは奪い取られ、更なるおやつを求めて吊るされる。

繰り返すがこの吊るされる光景はよく見る光景でもある。

それが一望できるのもここ最近のいつもの光景である。

最初は驚いたがさすがに見慣れてしまえば、楽しい光景ではないか

？

「じー」

幼女の強い視線が解き放たれる。その視線は疑いの瞳だ。幼女の視線は射貫くように見つめられている。

「……」

「じいじいー」

コーヒーを置き、指を鳴らす。ウェイターがお盆片手にやってくる。

短くいつものといい、幼女に視線を下す。

「食べるかい？」

「食べる!!」

即答で帰って来る。そりや食べると言う。

——そりや即答する。私だつてそうするし誰だつてそうする。

この校長は六泉ヶ丘高校の校長であり、劇団あかぐまの特別顧問でもある。

立場ある身の上だが、イメージというものがある。

「だから、私が食べていたのは秘密に」

「はーい。パフェのおじちゃん!!」

少し考える。ずずいとテーブルに乗り出しよう告げる。

「ダンディをつけると嬉しい」

「はい、だんでいーなパフェおじちゃん」

「フツ……」

それでよいと言わんばかりにコーヒーを一口。

さすがにイメージというものがある。ここで部下の痴態を見ながら、パフェを舌包みを打つ所業を他に知らせられては困る。甘党であることをひた隠しにしている身の上では特に……

「で？ 何を知っているの？」

「それは秘密」

「何を企んでいるの？」

「教えない。君にもわかるはずだよ？」

しびらへんてー——

二人はパフエを幸せそうな顔でつづくのである。
さながら、孫と爺のような構図ではあるのだった……